

派遣者番号	R7K05	氏名	二瓶 美紀	
研究主題 —副主題—	道徳科における「個別最適な学び」の充実 — 教員の実態調査・授業実践を通して —			
派遣先大学	帝京大学教職大学院	指導担当者	藤澤 美智子	赤堀 博行
所属	多摩市立北諏訪小学校	所属長	板澤 康矩	

キーワード： 個別最適な学び 主体的・対話的で深い学び 道徳科の特質

要旨： 本研究は、道徳科における「個別最適な学び」の在り方と教員の実態を明らかにし、児童が主体的に学べる授業づくりに寄与することを目的とする。まず、学習指導要領や中央教育審議会答申を基に道徳科に求められる個別最適な学びの理念を整理し、関連語句の分析や過去の実践からその特徴を考察した。さらに、道徳科を指導している教員への質問紙調査と道徳科指導教諭へのインタビュー調査の結果、多くの教員が道徳科における個別最適な学びの具体像をもていない一方で、指導教諭は道徳科の特質と結び付けて個別最適な学びについて理解している実態が示された。これらを踏まえ、小学校6年生を対象に3回の授業実践を行い、自己を見つめる学習を中心に個別最適な学びを促す工夫の効果を検証した。その結果、道徳科の特質を踏まえた指導と個別最適な学びを促す手だてが共に機能することで、主体的・対話的で深い学びの実現に寄与することが明らかとなった。

道徳科における「個別最適な学び」の充実

— 教員の実態調査・授業実践を通して —

二 瓶 美 紀

帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース

キーワード： 個別最適な学び 主体的・対話的で深い学び 道徳科の特質

I 研究主題の設定と目的

1 主題設定の理由

中央教育審議会答申（2021）には、「子供が『個別最適な学び』を進められるよう、教師がきめ細かく指導・支援することや、子供や自らの学習状況を把握し、主体的に学習を調整できるよう促すこと」とある。

また、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説「特別の教科 道徳編」では、道徳教育を行う際、「児童一人一人は違う個性をもった個人であるため、それぞれ能力・適性、興味・関心、性格等は異なっていることにも意を用いる必要がある。」と明示され、さらに道徳科においては、「発達の段階を前提としつつも、指導内容や指導方法について考える上では、個々人としての特性等から捉えられる個人差に配慮することも重要となる。児童の実態を把握し、指導内容、指導方法を決定してこそ、適切に指導を行うことが可能となる。」と示され、道徳科を行う際に教員は学校、学年、学級といった大きくくりの実態把握はもちろんのこと、それらを構成する児童一人一人の実態把握をつぶさにしていくことがよりよい指導の出発点であると捉えられる。

以上のことから、現在の学校教育においては、教員は個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を意識した授業改善を行い、児童が各教科等に必要な資質・能力を獲得できるようにすることが求められている。それは、道徳科においても同様である。

道徳科の「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に関する先行研究において、樋口（2024）は、

個別最適な学び・協働的な学びに対する小学校教員の意識を調査した結果、個別最適な学びを実現できそうな教科は、算数科、体育科、国語科の順であり、協働的な学びを実現できそうな教科は算数科、国語科、社会科の順であった。道徳科は、個別最適な学びと協働的な学びの両方で実現が難しいと考えられていることが分かった。

学校において、多くの教員は、樋口（2024）の意識調査結果と同様の傾向が散見され、道徳科においては個別最適な学びと協働的な学びの実現が難しいと捉えている状況が推察される。一方、道徳科の指導にたけている教員は、道徳科における個別最適な学びと協働的な学びは実現できていると認識している割合が高い傾向にあると筆者は感じている。

他教科のように道徳科も「個」や「協働」の学習場面における「個別最適な学び」の具体が示された書籍や指導資料、研修があれば、教員は道徳科の指導の際にそれらを活用したり意識したりしながら指導に当たることができるのではないだろうか。

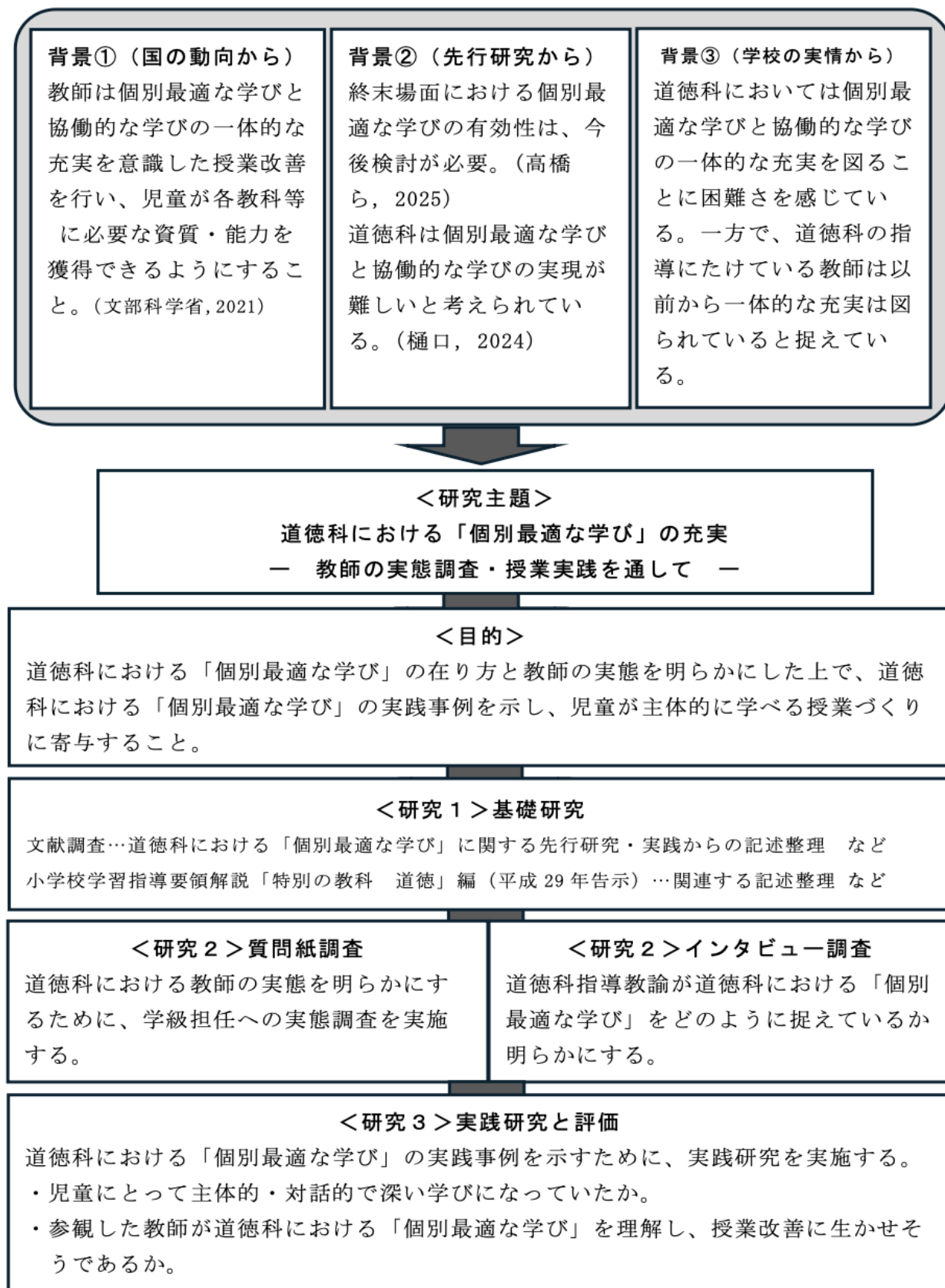
さらに、現在の学校は、配慮の必要な児童や外国につながる児童など、多様性を包摂する必要性を求められている。そのため、今まで以上にそれぞれの児童の実態や特性に合った「個別最適な学び」の手だてを講じながら授業づくりをしていくことが急務であると言える。

2 研究の目的

道徳科における「個別最適な学び」の在り方とそれに関わる教員の実態を明らかにした上で、道徳科にお

ける「個別最適な学び」の実践事例を示し、児童が主体的に学べる授業づくりに寄与することである。

II 研究構造図



Ⅲ 調査研究Ⅰ 基礎調査

1 道徳の時間及び道徳科の目標の変遷

これまでの道徳の時間に求められていたことや現在の道徳科に求められていることについて学習指導要領の変遷をたどり、確認した。

2 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して

全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現（答申）」

上記答申から、子供一人一人の道徳性を養う道徳科にするために教員が考慮する必要があることを考察した。

これまで児童主体の学びを促すために「個に応じた指導」が重視されてきたが、本答申発出以後は、児童自らが学習を調整しながら学んでいくことができるようにするための「個に応じた指導」であることや、「指導の個別化」と「学習の個性化」を教員視点から整理すれば「個に応じた指導」となり、学習者視点から整理すれば「個別最適な学び」と、立場により捉えが異なる概念が広く普及・浸透してきている。

よって、これからは、児童が主体的な学習者として学び続けていけるよう、「個に応じた指導」及び「個別最適な学び」の充実、実現を目指した授業の構成にしていくことは重要であると考えます。

3 「個別最適な学び」における諸事象

(1) 小学校道徳指導書及び小学校学習指導要領（平成29年告示）解説「特別の教科 道徳編」

小学校道徳指導書及び小学校学習指導要領（平成29年告示）解説「特別の教科 道徳編」において「個別最適な学び」に関連する語句の頻度を調査した。（表1）

現行の学習指導要領においては、「一人一人」の出現数が最も多く、次点は「特性」であった。現行の学習指導要領告示の後に、中央教育審議会答申（2021）が発出されたため、「個別最適」といった直接的な記述は見当たらなかった。しかし、上記の記述の増加は個別最適な学びを充実させることで、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すことであると捉えることができる。

表1 「個別最適な学び」に関連する語句の出現数

	個に応じた	個別	一人一人	特性	主体性	個に合った	個別最適
1958 昭和33年	0	3	0	2	0	0	0
1968 昭和43年	0	0	0	7	1	0	0
1977 昭和52年	0	0	0	8	1	0	0
1989 平成元年	0	2	20	3	7	0	0
1998 平成10年	1	2	25	6	6	0	0
2008 平成20年	2	7	28	13	8	0	0
2017 平成29年	1	2	41	11	10	0	0

(2) 今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策（答申）

1971（昭和46）年に発出された上記の答申は、技術革新の急速な進展と急激な変動が予想される今後の時代における教育の在り方を展望し、長期の見通しに立った基本的な文教施策についての諮問に対するものである。労働者の育成が、社会から学校教育へ求められていた高度経済成長期において、中教審は個性重視に舵を切り、この頃から徐々に学校教育に「個別」「個人の特性」などの考えが浸透し始めたことが理解できた。

(3) 愛知県東浦町立緒川小学校における実践

既に1980年代には、「指導の個別化」と「学習の個性化」という概念を対置させるモデルが考案されていた。そのモデルが機能するのか検討するために理念を体現したと言われている愛知県東浦町立緒川小学校の実践を考察した。

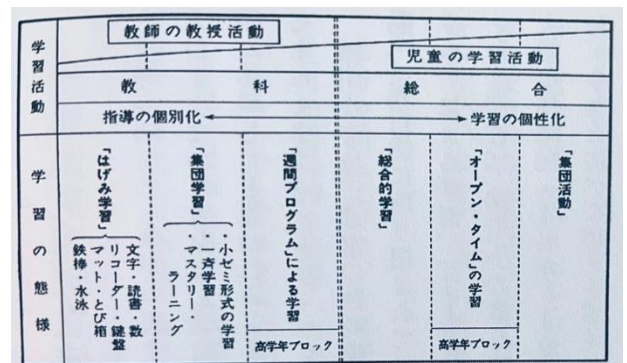


図1 緒川小カリキュラム（愛知県東浦町立緒川小学校『個性化教育へのアプローチ』明治図書出版、1983年、P33）

IV 調査研究Ⅱ 質問紙調査

道徳科を実施している教員の道徳科や「個別最適な学び」についての捉えを把握するために、A市公立小学校学級担任（特別支援学級も含む）を対象に質問紙調査を実施した。項目は以下の通りである。

調査項目	
設問1	所属する小学校について
設問2	現在担任している学年について
設問3	現在教職歴何年目であるかについて
設問4	道徳科の不安の有無について
設問5	道徳科の不安の有無の回答理由について
設問6	道徳科以外の教科の「個別最適な学び」のイメージの有無について
設問7	道徳科の「個別最適な学び」イメージの有無について
設問8	道徳科の「個別最適な学び」のイメージの有無についての回答理由
設問9	道徳科の「個別最適な学び」を充実させるために必要なことについて

調査の結果から見てきた課題二つを以下に示す。

第一に、道徳科の特質を生かした学習指導について十分に理解されていない現状があることである。「道徳科を行うにあたり不安がある」と回答した教員のうち、71.1% (59人) が「発問の適切さ」を理由とした。このことから、道徳科では教員の発問が児童の思考や話合いの深まりを左右するため、発問の重要性を理解している教員が多いことが分かる。(図2)

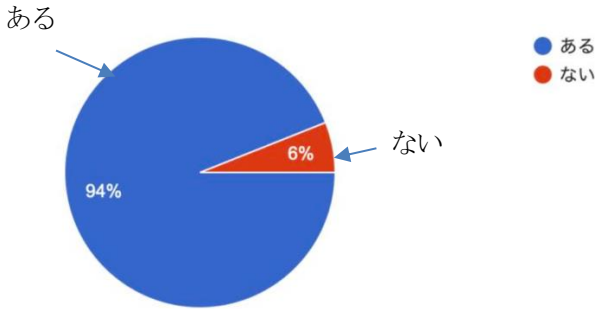


図2 道徳科に対する不安の有無

しかし、道徳科における「個別最適な学び」のイメージが「あまりできない」「できない」と回答した理由(図3)として、「道徳科は他者との関わりの中で自分の考えに気付いていく教科」といった道徳科の特質の捉えが不足していると推察される記述が複数あった。

第二に、道徳科における「個別最適な学び」の姿と充実を促すための手だての理解が十分ではないことである。設問7で「あまりできない」「できない」と

回答した理由として、「何が個別最適かわからない」「個別最適な学びが実現できているかどうかの基準が勉強不足で理解できていないから」という記述があった。設問9では、「役割演技や動作化などの表現活動の工夫」「評価の工夫」「説話の工夫」の回答が少ないことから(図4)、指導の工夫と個別最適な学びの充実とが結び付いていない教員がいる現状が明らかになった。

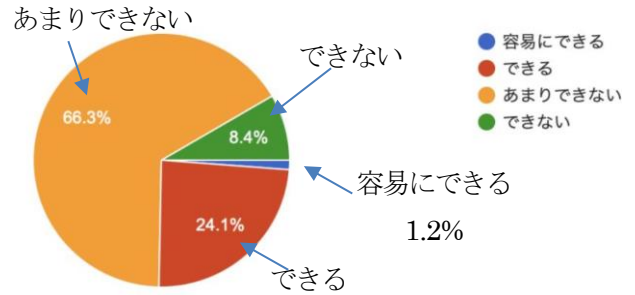


図3 個別最適な学びのイメージの有無

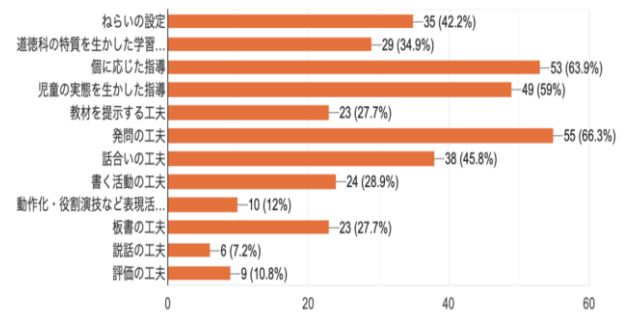


図4 道徳科の個別最適な学びを充実させるために必要なこと

V 調査研究Ⅱ インタビュー調査

道徳科指導教諭が、道徳科における「個別最適な学び」をどのように捉え、その学びを充実させるためにどのような工夫をしているのか明らかにすることを目的に、7名の道徳科指導教諭を対象にインタビュー調査を行った。調査内容は、以下の通りである。

設問	調査内容
設問1	現在担任している学年について
設問2	道徳科における「個別最適な学び」の充実について
設問3	設問2で回答した理由について
設問4	道徳科の現在の課題について
設問5	個人差などを大切に授業展開するための工夫について
設問6	道徳科においてどのような学習で「書く活動」を取り入れているかについて
設問7	道徳科の評価を、個別指導にどのように活かしているかについて
設問8	発達障害等配慮の必要な児童に対する支援について
設問9	外国から帰国した児童や外国にルーツのある児童に対する支援について

調査の結果から、明らかになったこととして、以下の二点を挙げる。

第一に、道徳科指導教諭は、道徳科における「個別最適な学び」を、道徳科の目標にある「自己を見つめること」と捉えている場合があることである。設問2から全員が道徳科における「個別最適な学び」を充実することができると考えていることや設問3では7人中5人が道徳科の特質と関連させた内容の回答をしたことからである。

第二に、道徳科における「個別最適な学び」を充実させるために、日々、児童理解に努めその上で様々な学習場面において「個に応じた指導」を行っていることである。設問5から、教員は児童の実態を把握した上でその状況に最適と考えられる工夫をするだけでなく、児童が自己の学びを肯定的に受け止められるよう適宜価値付けをしていること、設問8や設問9からは事前に教材の内容を伝えておくなど、対象児童が道徳科に少しでも興味をもったり安心したりした状態で参加できるよう支援している実態が明らかとなった。

また、これら多数の個に応じた指導は、中央教育審議会答申（2021）に示された「指導の個別化」に分類できるものが多いと言える。

VI 実践研究と評価

基礎研究と実態調査で明らかになったことを踏まえ、道徳科における「個別最適な学び」を「自己を見つめること」、道徳科における「個別最適な学び」を充実させることは、「道徳科の目標や主体的・対話的で深い学びの実現を目指すことに直結する」と定義し、その充実を目指した授業を所属校の第6学年30名の児童を対象に3回実施した。

また、各回終了後、参観者を対象に道徳科における「個別最適な学び」の実現に向けたイメージができたか否かを問う質問紙調査はWebアンケートを活用し、実施した。児童へは3回の授業終了後、道徳科における「個別最適な学び」を促す工夫の効果などを問う質問紙調査を行い、授業実践の効果を分析した。以下は参観者と児童への調査内容である。

・参観者への質問項目

設問	調査内容
設問1	参観した日について
設問2	所属する小学校について
設問3	現在、担任している学年について
設問4	現在、教職歴何年目であるかについて
設問5	授業から道徳科の個別最適な学びのイメージができたかについて
設問6	授業から道徳科の個別最適な学びのイメージができたかについての回答理由
設問7	その他（気づいたことなど）について

・児童への質問項目

設問	調査内容
設問1	道徳科で自分のことを考えられているか
設問2	問1でそのように答えた理由
設問3	ワークシートの選択について
設問4	役割演技について
設問5	導入でアンケート結果を提示することについて
設問6	教師からの声掛けについて
設問7	考えをもてる時間をとったことについて
設問8	終末の学習活動について
設問9	道徳科の捉えについて
設問10	道徳科への希望について

1 個別最適な学びの充実を意図した道徳科の授業

(1) 授業1 令和7年10月28日（火）

①ねらい

法やきまりは自他の生命や権利を守るために存在するという意義を理解し、すすんで守ろうとする心情を育てる。

②個別最適な学びを促す工夫

ア 事前アンケートの活用

授業前に学習者用端末を使用し、きまりに関するアンケートを実施した。その結果を導入で示し共有することで、自分の回答と学級の仲間の回答を比較するなどねらいとする道徳的価値への問題意識を高めることができる。また、展開後段や終末の振り返りの場面で、考えをもつことや深めることに苦戦している児童には、事前アンケートの回答を伝え、自己内対話の活性化を促す。

イ ワークシートの工夫

本時の学習に関連する問題意識によって、ワークシートを選択できるようにした。選択することを通して、児童が必然的に学習状況を振り返り、自分に合った学習方法で学習を深めるという主体性を身に付けることにつながると考えた。

ウ 書く活動の工夫

展開後段と終末で書く活動を取り入れる。自ら

考えを深めたり整理したりすることができるよう、じっくりと考える時間を確保する。

エ 学習状況を見取る工夫

児童一人一人の道徳的価値への理解の状況や考え方、生活の様子など授業前に把握した情報などを一覧にまとめ、学習状況を見取りやすくした。

③ 児童の学習状況からの考察

事前アンケートを実施し、その結果を導入で提示したことで、児童は自分の回答と学級の仲間の回答を比較し、主体的に質問し合う姿が見られた。また、指名をするときや机間指導時の声掛けに有意義なものであった。ワークシートを選択することが初めてだったため、戸惑いを見せる児童や座席近くの仲間と同じものを選択する児童がいた。次回の授業では、選択できるようにした意図を伝えていく。ヒントに挙げるキーワードは、ねらいからそれないよう精選し提示する必要がある。

④ 参観者の質問紙調査からの考察

ワークシートを2種類作成し、両面印刷をして、児童が選択できるようにしたことや児童の事前アンケートの結果や日常生活の様子などをまとめたものを確認しながら声掛けなどをしたことは、参観者への道徳科における「個別最適な学び」の理解につながったと言える。

(2) 授業2 令和7年11月14日(金)

① ねらい

時と場に応じた礼儀正しい行為について考えを深め、心をこめて相手に接していこうとする実践意欲を育てる。

② 個別最適な学びを促す工夫

ア 事前アンケートの活用(意図は授業1参照)

イ 教科書を主体的に活用する工夫

教員による読み聞かせの終了後も、必要に応じて児童が教材に立ち返ることができるよう教科書の扱いは児童に任せる。そうすることで、児童が安心した気持ちで授業に臨み、道徳的価値の理解を容易にしたり深めたりできると考えた。

ウ 意図的指名の工夫

本教材は、二つの場面構成となっている。児童

がどちらの場面に興味をもったか事前に調査し、把握した上で学習を進める。あまり挙手をしない児童や自分の考えを表現することに苦手意識をもっている児童に対しても意図的に指名することで、多くの児童に発言の機会を与え、学習への主体的な参加を促せると考えた。

エ ワークシートの工夫(意図は授業1参照)

オ 書く活動の工夫(意図は授業1参照)

カ 学習状況を見取る工夫(意図は授業1参照)

③ 児童の学習状況からの考察

ワークシート(写真1)を配布する際に、どちらかを選択できるようにした意図を伝えたことにより、児童が自身の学習状況を振り返り、自分に合った学習方法を選択しようとする姿が見られた。今回の教材は、2部構成のため、事前に教材を読み、どちらに興味をもったか調査、把握し学習を進めた。その情報を把握しながら、意図的に指名したことで前回よりも多くの児童が発言する機会を得ることができた。書く活動を2回設定してきたが、児童の様子やワークシートへの記述状況から展開後段にじっくりと時間をかけ、十分自己を見つめられるようにする必要がある。

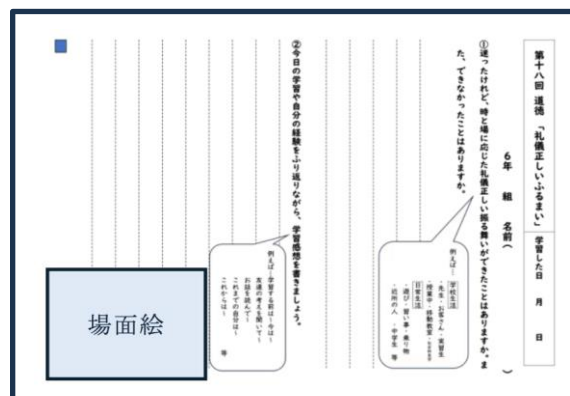


写真1 ヒントつきワークシート(両面印刷)

④ 参観者の質問紙調査からの考察

1回目同様、学習状況に適したワークシートを児童に選択できるようにしたことや、児童の事前アンケートの結果や日常生活の様子などをまとめたものを確認しながら教員が児童への声掛けなどをしたことは有効であったと捉えられていた。加えて、意図的指名についても、ほぼ全員が

間を置かずに発言できていた様子から、発問に対する自分の考えをもてていたとすることができるとともに、児童の考えに対する多様な問い返しを用意し柔軟に対応することや児童の言動に対する教員の価値付けや賞賛をすることは、児童が安心して学習に参加できる学級風土の醸成と関係していることも伝えていきたい。

(3) 授業3 令和7年11月20日(木)

①ねらい

日々の生活が多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っていることよき気づき、それらの人々の善意に感謝して生活しようとする心情を育てる。

②個別最適な学びを促す工夫

ア 事前アンケートの活用(意図は授業1参照)

イ ワークシートの工夫(意図は授業1参照)

ウ 書く活動の工夫

展開後段で書く活動を取り入れる。書く活動をこれまでの2回から1回にしぼった。

エ 学習状況を見取る工夫(意図は授業1参照)

③児童の学習状況からの考察

書く活動を展開後段に設定し、じっくりと時間をかけたことにより、自己を見つめられたことが児童の振り返りの記述量や内容から明らかとなった。加えて、阪神・淡路大震災の概要や日本とリトアニアの位置関係などを確認することにより、児童の教材理解を促進したと考える。終末の教員による説話では、今後も考えを深めていけるような言葉の紹介をした。児童はワークシートの端にメモをしたり、興味をもって聞いたりする様子が見られた。

④参観者の質問紙調査からの考察

1~2回目同様、ワークシートを選択できるようにしたことや児童の事前アンケートの結果や日常生活の様子などの一覧の作成、活用は有効であると捉えられていたと言える。「全体で意見を共有することは、多面的、多角的思考を広げることにつながった」との参観者の記述から、自己を見つめたあとに意見共有する場面を設定する有効性を提

示できた。このことから、個別最適な学びは協働的な学びと一体的であってこそ充実が期待できることも示せたのではないだろうか。

2 実践研究を終えての考察

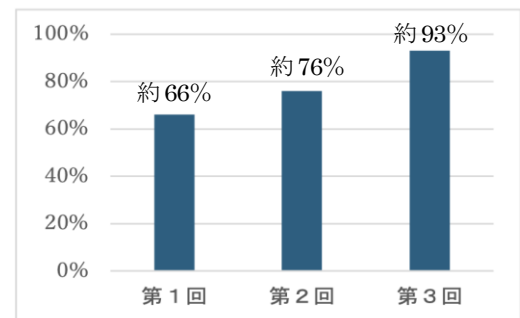
(1) 児童の主体的・対話的で深い学びの視点

①事前アンケートの活用

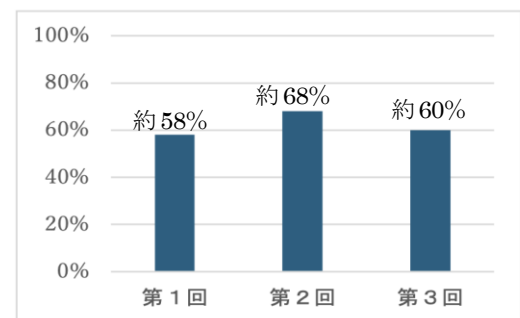
児童一人一人の道徳的価値の捉えを事前に把握することにより、教員は意図的指名や個に応じた的確な机間指導を行うことができた。また、導入時にアンケート結果を学級全体で共有し、自分の回答と仲間の回答を比較することで、児童同士、自然な流れの対話が生まれた。

②ワークシートの選択制

授業2からは児童に伝わりやすい言葉で選択する意図を伝えるようにした。グラフ1とグラフ2に示すように、回を重ねるごとに児童の振り返りが趣旨と合致している割合は高くなるが、ヒント付きのワークシートの選択率はほぼ横ばいである。この結果から、児童は自身の学習状況を省みて、自分に合った学習方法を主体的に選択・調整できるよう変容していったと言える。



【グラフ1 学級全体の振り返りとねらいの合致率】



【グラフ2 ヒント付きワークシートの選択率】

③学習活動の精選

3回目の授業は、展開後段（自己の生活の振り返り）のみに書く活動を取り入れ、十分な時間配分となるよう学習活動を精選したことにより、児童はねらいとする道徳的価値とじっくり向き合えたことがワークシートへの記述量・内容から見てとれた。

児童が自分に適切な学習方法を選択できるようにするために、教員がその学習や学習方法の意図や効果を伝えていくことは、主体的・対話的で深い学びの実現には必須である。また、主体的な学習者へと児童の意識を変換させていくことも求められる。

では、具体的な場面でどのような指導をしていく必要があるのだろうか。それは、第一回の道徳科を行う前に、道徳科は道徳的価値を自分との関わりにおいて捉える時間であることなど道徳科の学び方を丁寧に児童に伝える。それに併せて、毎回の道徳科で特質を押さえた学習が展開されれば、児童の意識はおのずと変化し成就感も高まると考える。

(2) 教員の授業改善の視点

道徳科における「個別最適な学び」を促す工夫として、参観者が特に理解したことはワークシートの選択制であった。また、事前アンケートに基づく個別の指導や意図的指名も有効であったと言える。

また、児童が自分なりの考えをもち、思考を広げられる発問を構成することの重要性を、授業を通して伝えることができたと考える。いかに指導方法の工夫をしようとも、道徳科の特質を押さえた学習でなければ道徳科における「個別最適な学び」とはならないからである。

児童にとって主体的に学べる道徳科にするために、道徳科の特質と指導方法、中央教育審議会答申(2021)に示されている内容の確認、それに併せて具体的な個別最適な学びを促す工夫を教員に伝達し、その教員が児童の実態に応じてアレンジし、授業を構成できるようにすることが必要であると考えた。

Ⅶ 成果と課題

1 成果

(1) 道徳科における「個別最適な学び」の充実は、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すことでありと捉えることができた。

(2) 小学校学級担任（特別支援学級も含む）を対象にした質問紙調査では、道徳科の特質を生かした学習指導や道徳科における「個別最適な学び」の姿と充実を促す手だてについて十分に理解されていない実態を把握できた。

(3) 道徳科の特質を押さえた学習と個別最適な学びを促す指導方法の工夫の両方が機能してこそ、道徳科における「個別最適な学び」の充実がなされることを、実践研究を通して参観者へ示すことができた。

2 今後に向けて

(1) 児童が生涯にわたって能動的に学び続けられるようにするために、教員は個に応じた指導を提供するだけでなく、児童が主体的に学習を調整できる環境、つまり「個別最適な学び」を整えていく意識をもち、指導にあたることを提案する。

(2) これから教員は、道徳科の特質と指導方法、中央教育審議会答申(2021)に示されている内容を理解・確認をすること。併せて、具体的な個別最適な学びを促す工夫など引き出しを増やす必要がある。道徳科指導教諭らは、模範授業や協議会を通して、これらを伝達していくことを提案したい。

Ⅷ 主要参考文献

- ・中央教育審議会、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して—全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現—(答申)」, 2021.
- ・文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 特別の教科 道徳編」